
闇夜に輝く月

笹波あやめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇夜に輝く月

【Nコード】

N2477S

【作者名】

笹波あやめ

【あらすじ】

フィエナ国は、かつては王制、現在共和制の国家。どう考えてみてもその一般社会になじめていない集団「ムーンライト」には、ミステリー・スカーレットといううら若き女性が暮らしている。彼女がここにきたきっかけは、王制時代に権威を持っていた「魔道士」に学者だった父が興味を持ったために、「危険人物」として政府の手で殺されたことであった。それから幾年も過ぎ、社会はもとより、そのせいで人生を狂わされたミステリーにとっても過去の存在だったはずの「魔道士」だったが、その存在が再び、事件を引き起こし

ていく…。念のため残酷タグを設定していますが、それほど強い描写ではない予定です。＊不定期更新です。ご了承ください。＊

プロローグ すべてののはじまり（前書き）

本編開始よりも数十年前の出来事です。

プロローグ すべてののはじまり

ここは、どこかで何かが起こりそこねている世界。

フィエナ国・元宮廷専属魔道士長、ダノン・チェスナットは非常に苦悩していた。

魔道士とは何か？

どこかの国の陰陽師のようなものと考えて、当たらずとも遠からず。

天文の観察や吉凶の判断などを通して世の中の安定に貢献していた…はずだった。

しかし、時代は変わった。この国の政治体制ががらっと変わってしまった。

それと共に政治の表舞台から彼らは追放され、訳の分からない術を用いて人々を惑わす存在として、新しい政府から弾劾される身となってしまった。

だいたい、革命のせいで、主要な活動場所だった王室がもうなくなってしまったんだから、もうどうしようもない。

今、危険人物と目される彼らを助けてくれるものは、だれもいない。

ダノンは覚悟を決めると、侍女のチェリー・スカイを自室に呼び寄せた。

「旦那さま、お呼びでございますか？」

ダノンは特に何も言わず、彼女を自分の脇に座らせた。

灰色の大きな瞳をしたチェリーは、ダノンにとって、今現在もつとも心安らぐ存在。

なにしろ人知れず子どもを産ませてしまったのだから…

「チェリー、今日の新聞にこんなことがかいてあったぞ。」

「なんででしょうか？」

「“王制時代に使われた占い・呪術の類に関する知識を公にすることを禁止する”らしい。」

まったく、占術だの、呪術だのというものを信じる時代は終わったらしいな。」

ダノンは寂しそうに言った。彼とその先祖たちが、代々家業として受け継いできた知識は、無用のものであるばかりか、罰せられる対象となってしまったのだから。

「そんなことはございません。今まで旦那さま方がいかに大切な役割を果たしてこられたのか、今に世間も思い直しましょう！」

「いや、時代はもう、元には戻らない。もうこの家も、我々も、終わりだ。葬り去られるしかない…」

動揺して叫ぶチェリーに対し、ダノンは静かに事実を告げた。

どうしてこうなってしまったのか？そして、これからどうやって生きていけばいいのか？

そもそも、生きていくことを許されるのであろうか？

2人とも、ややもすればじつと黙りこんでしまいそうになる。

「そこでだな、チェリー。お前のために1つ提案がある。」ダノンは氣力を振り絞って言った。

「なんでございましょう？」

「ジャスパーを連れて、どこへなりとも逃げる！」

「それは…どういふことでございますか！？」

ジャスパーとは、チェリーとダノンの5歳になる息子。使用人小屋で、世間に知られずに育てられている。

「お前たちの存在は、まだ世に広く知れ渡っているわけではないから、今ならまだなんとかなる。だから、生きのびて欲しい。」

チェリーは、正式に結婚した相手ではないから、彼女とその子の存在を知っている人はまだあまりいない。

今ならまだ、きつと間に合う。逃げ切れる。

「そんな…」チェリーは泣き出してしまった。

「金子^{きんす}も、服も、お前が望むだけ持っていけばよい。それで、ジャスパーを、普通の立派な人間として育ててやれ。分かったな？」

ダノンは必死だった。自分の血をひく人間を残す方法が、これ以外にあるとは思えない！

「はい…はい！」そこで、チェリーはやつと顔をあげることができた。

「きつと、きつと、あの子と生き抜いてみせます！どうか、お守りください。どんな目に遭おうとも…」

チェリーは、ある決意をしてダノンの屋敷を出た。

ほとぼりがさめたら、この子には、いつか、チェスナットの名字を名乗らせてやりたい。

重要な位置を占めた一族の血を、ちゃんとひいているんだということ、なんとかして、子孫にまで伝えてあげたい。

それには一体、どうすればいいんだろう…

それから数日後のことであつた。

新政府のもとに、ダノン・チェスナット邸から、ダノンとその家族たちが自害しているという連絡が入った。

新政府の対応は苛烈を極めた。

チェスナットの屋敷は、住人達とともに、すっかり焼き払われてしまったという。

それは、怪しげな術で人々を惑わし、国を惑わす者が、再び現れないようにするため…

起こるべくして起こった事件（前書き）

本題よりも10年ちょっと前のことです。

起こるべくして起こった事件

それは、暑い盛りの季節であつた。

その日、ファイエナ国最大級の商社「ザ・サン」のトップ、セーウス・コンパニーは普段通り出勤して、自分の居場所…会長用執務室にいた。

普段通り出勤し、普段通り書類に目を通すという、始まりかけたコンパニー会長の日常は、突然、結構静かに終わりを告げた。部屋のクローゼットの中から、ゴトゴトと不自然な音がしてきたからである。

それは部屋の主であるコンパニーしか、決して開けてはいけないうクローゼット。普通の物入れスペースのはずなのに、トップシークレット。つまり中身はどうなっているのか、社内で他に知る人はいない。

コンパニー会長がそこを開けると、よれよれの服に安っぽいサングラスをかけた、何とも怪しげな男がいた。もちろん、社内になだらしなさそうな人間はいるわけない。なんとこのクローゼット、外部とつながっている「隠し出入り口」なのであつた！

そう、セーウス・コンパニーは、仕事場に秘密の隠し扉を持ち、到底表玄関からは入れないような者達と情報をやりとりする、「裏の顔」を持っていたのだ。

「どうした、お前がここにくるなんて珍しいな。何かあつたか？」
会長は中の男に話しかけながら、ちよつといやな予感がしていた。

この男は経歴不明、ミスターと呼ばれている会長配下の者達の代

表格である。普段は下っ端を遣わすばかりで、自分からはあまりここに来ない。この男が中にいる時点で、何か普段と違うことが起きているといってよい。

「それはそれはえらいことになりました、皆出払っちまいましたからね。他に来るもんがないんですよ。」

「一体、何があった。」

「えらいことになりましたよ、とうとう……」ここでミスターの目つきが少し鋭くなった。

「スカーレット先生のお宅に警察が来て、捕まったそうですよ。」

「何だと！」

スカーレット先生……マルス・スカーレットは政治学や政治史学に詳しく、研究の傍ら、市内の実業学校で社会科の教鞭をとっている。そしてコンパニー会長にとっては、学生時代からの友人でもあった。亡くなったマルスの妻ともども、ずっと仲良くしてきた。

「そうか。罪状はやはり……」

「国家を騒乱させかねない罪、というところなのでしょうね……ちゃんとはまだ聞いていませんが。」

「あの子はどうした。」

「下の者をお宅に遣わしております。オリーブ夫人もおりましたし、引っ張られていったということはないでしょうが……どうされますか？」

「もちろん、見に行く。」コンパニー会長は迷わず、即答した。

「黙って出かければ返って怪しまれかねん、秘書に一声かけてくるから、お前は先に下に行つてろ。」

「かしこまりました。」

男が姿を消すのと同時に、コンパニーはそっとクローゼットの扉をしめた。

さあ…とうとうきたか。

自分の机や戸棚の扉に（もちろんクローゼットにも）鍵をかけながら、コンパニー会長は今後のことを、意外と冷静に考えていた。

スカーレット氏は、最近、政治学の研究テーマとして、かつてこの国の政治に重要な役割を果たしていた、「魔道士」という存在に注目していた。

しかし今の政権、というより政治の在り方は、その「魔道士」の役割を、単なる迷信として全否定するところから出発した共和制だ。その観念―「魔道士」なんて所詮インチキなもの―は、ごく普通の一般民衆にもだいたい共有されたものである。

政府からも、普通の人々からも、危険視されてしまいかねない研究。

あまり社会の受けは良くない。（だからこそ自分がいろいろと面倒をみてきたんだけれど。）

もしかしたら、場合によっては、不当な攻撃を受けることがあるかもしれない。頭の片隅では、しばらく前から覚悟しているつもりだった。

だが、何も、今…

コンパニー会長は、重要書類をしまい終えたところで、呼び鈴をならして秘書を呼んだ。

「いかがいたしましたか、会長。」

「わしはもう帰る。寄るところがあるから、馬車は出してくれんていい。」

「いきなり、何があつたんですか？」

秘書はびっくり仰天している。

コンパニー会長クラスの大物が、真昼間に突然１人で出かけるなんて、普通はありえないことだ。

「大丈夫だ！明日の会議にはちゃんと帰ってくるから、気にするな！」

コンパニーは若干乱暴に言つと、あんまり行つて欲しくなさそうな秘書をしり目に、勝手に出ていってしまった。

コンパニー会長がミスターと向かったのは、スカーレット氏の自宅であった。

そこでは、ミスティー・スカーレットという彼の８歳になる娘が、まだいるはずである。

問題の家（前書き）

もう少し、コンパニー会長さん目線の状態が続きます。

問題の家

道中襲ってくる者がいないか（！）など、いろいろ心配はあったが、ミスターの運転する車に乗ったコンパニー会長は、無事にスカーレット氏の家にたどりついた。

車を降りると、あたりは、2人が拍子抜けしてしまうほど静かであった。

「静かですな。」ミスターが言った。

「そうだな。まるで何も起こっていないかのようだ。」

「もしだれかいたらどうします？ 始末しますか？」ミスターの目が鋭くなった。

「ミステイーのためには仕方なかるう。おや、だれか来るぞ、ブローディーかな。」

2人の車に近づいてきたのは、ミスターの部下のブローディー。堅い表情で部下を統率するだけでなく、もし喧嘩沙汰になったとしても十分対応できる体力も備えた人物だ。不測の事態に備えて、事件の一報を聞いてすぐに、数人の仲間を連れて守りを固めて来てくれていたのだ。

「ブローディー、御苦労であった。何もなかったか？」コンパニー会長が聞いた。

「何もないわけございませんが、我々が着いた時には、奴らはもう引き揚げた後のようでした。」

確かに、面白いほど静かではございますがね。」

この暑いのに、相変わらず堅めの服で身を包んだブローディーは、家に目をやりながらそう言った。

「そうか。」

コンパニー会長一行が話しながら玄関に着くと、中から扉が開き、恰幅の良い体格で、会長達と同じくらいの年齢としの女性が出てきた。

「オリブ夫人、そなた、いてくれたのか！」

コンパニー会長は、よしみの女性を認めると、ほっとしたように言った。

「会長、会長、ああ、やっと来てくださったのでございますね！もう、それはそれは、大変なことになってしまいました……」

中から出てきたオリブ夫人は、主婦のいないこの家の手伝いをするためにしよっちゅう出入りしており、もちろんブローディーやミスターの一味だ。

「大変なことになったな、オリブ夫人。」

「はい、それはもう、ひどい目に遭いました。さあ、中にお入りくださいまし。」

オリブ夫人に導かれ、家に入った3人は、言葉を失った。

玄関すぐのリビングと、そこに続く台所は、どこもかしこも荒らされてしまい、見るも無残な様子になってしまっている。

「これは……」百戦錬磨のブローディーも、なかなか言葉が出なかった。

「家宅搜索と称して、それはもう、荒らし放題に荒らしていったのでございます。」説明しているオリブ夫人は、半泣きになってしまっている。

「さぞかし、いろいろと持って行ったことでしょうか。」ミスターも、平静を保とうと必死になっているかのようである。

「はい、それはもう、ミステイさまのお部屋まで入ってきました……」

「そうだ、ミステイー！！ミステイーはどうしてる？」最も重要なことを思い出したコンパニー会長が叫んだ。

「無事でございますとも！隠し部屋にお隠れです。」

「隠し部屋！？いつの間にそんなものを？」親友のコンパニー会長でも、その存在を知らなかったらしい。

「こういうこともあるかと思って、用意してあったのですわ。ミスティさまと、ごくごく何冊かの書物だけが、無事でいらっしやるはずでございます。」

「そうか。それはよかった！会わせてはもらえんか？」

「もちろん、ご案内いたしますとも。」

オリブ夫人に連れられて、コンパニー会長、ミスター、ブローディーは、階段を上がっていった。

一行は2階に上がった。2階のどの部屋もひどい状態であつたが、とりあえず子どもスカーレット氏の娘、ミスティのための部屋へと向かう。

「この部屋も大そう荒らされたようすな。お気の毒なことに。」
ミスターが一番につばやいた。

8歳の彼女が何を疑われたのか、部屋は憲兵達にすっかり荒らされてしまっている。

「まったく、ひどい話だ。して、ミスティはどうした？」

「まあまあ、焦らないでくださいまし。大丈夫でございますからね。」

オリブ夫人はそういうと、ミスティの使っている小ぶりのベツドの布団やマットレスをどけると、四隅に枝のようなものを差しこんだと思いきや、寝台の“すのこ”を取り外した。

「このすのこを外すのには、ドライバーの代わりに鍵が必要になりますからね、幸いにもばれずに済みましたよ。」

オリブ夫人は得意そうに言った。彼女自身は特に調べを受けなかったので、細長い鍵を隠し持っていることが分からなかったのである。

そしてベッドにできた空間の中に入ると、カーペットをめくっていく。

「ほう、外せるのか…おや？」

コンパニー会長、ミスター、ブローディーは、カーペットの下から現れた扉を見て驚いた。ついに隠し部屋の登場だ。

「ベッドがあり、カーペットがあり、なかなかこれには気付かないでしょう？」

オリーブ夫人は少し元気を取り戻し、得意そうだ。

「しかし、入るのも大変そうではないか。」

「普段は、すぐ入れるようにこの部分のカーペットはめくつてあるし、すのこだつて鍵をかけてないんですよ。掃除もしなくてはなりませんからね。」

オリーブ夫人は何でもないことのように、コンパニー会長に答えた。

「さあ、この下です。」オリーブ夫人は続いて、床の扉の鍵を開けにかかった。

「ミステイーさまぁー、お待たせいたしました。コンパニーのおじさまがいらしてくださいましたよ。いま開けますからね。」

そうして声をかけると、重たい扉をゆっくりと持ちあげた。

「ミステイー、大丈夫だったかい？」

コンパニー会長はたまらずに、扉の中に向かって声をかけた。

すると、父親譲りの大きな瞳を持ち、母方譲りの茶褐色の滑らかな髪を2つ結びにした少女が、恐る恐る顔を出してきた。

彼女こそ、スカーレット氏の1人娘、ミステイー・スカーレット。

「おじさま…コンパニーのおじさまなの？」

それこそ生まれる前から会長と知り合いのミステイーは、彼のことをおじさまと呼んでいる。

「そうだよ。助けにきたんだよ。」コンパニー会長は優しく言った。

「おじさま…怖かったわ!!」

ミステイーはコンパニー会長に飛びつき、わあわあと泣いた。

コンパニー会長とミステイーが再開を果たした、その時。

「大変、まただれか来たようですよ!」

ブローディーの声で、大人全員が我に返った。

「だれだ?」

「警察関係者のようです。ですが…人数は、2人だけ。少ないですね。とても家に押し入ってくる感じじゃない。一体何でしょう。」

彼らに見つかからないように外をうかがっているのは、ブローディーだ。子ども部屋は幸か不幸か、玄関のすぐ上に位置している。

全員、外から見えないように窓のすぐ下に座り込み、様子を見てみることにした。

ドンドンドン。扉を叩く音がする。

「あのー、スカーレットさん、どなたかご在宅ですかー?」

玄関から声が聞こえてきた。

「今度はだれなの?」ミステイーはすっかり怖がっている。

「居留守を使おう。押し入ってくるような雰囲気じゃない。」

コンパニー会長が、胸にミステイーをしっかりと抱きしめながら言った。

ブローディーの部下達には、強引に押し入ってくるような感じではない限り、部外者に手を出さないように言っている。無用のいざこざを避けるためだ。

このまま、接触しなくて済めば、一番いい。

応答がない、と判断してくれたらしく、玄関の奴らは、それ以上は声をかけてこなかった。その代わりにゴトリ、と玄関先で音がした。

「今の音は…郵便受けか?」数秒待ってから、会長が静かに言った。

「そのようですよ。あの2人連れ、帰っていきますね。もう車が出て行きますよ。」ブローディーはずっと外を見ていた。

「じゃあ、行ってみるか。」

ブローディーの言葉を合図にしたかのように、会長以下全員が玄関へと降りて行った。

ミステリーの運命（前書き）

更新が遅くなりすみません。

当然、まだスカーレット氏の家にはいます。

ミステリーの運命

一行がまだ片づけられていない玄関に行くと、先程までなかった、まっさらな封筒が1つ落ちていた。

「これですな。あの奴らが入れてったものは。」

ブローディーは薄っぺらな封筒を拾い上げた。玄関扉のすきまから、先の2人が入れていったらしい。

「開けても、大丈夫そうか？」会長はミステリーをしっかりと抱き抱えながら聞いた。

「中は紙しかないと思いますが…会長は念のため離れていてください。」

そう言うとブローディーは、皮手袋をはめたまま封筒を開けた。中には紙が1枚入っているだけ。

「警察からのようですよ。」

「なになに…これは…」

封筒そのものをまだチェックしているブローディーの横で、早々に中身を見ていたミスターは、固まってしまった。

「どうした、ミスター！」

「会長…」

紙の中身を要約するとこういうことになる。

マルス・スカーレット氏は、取り調べの最中に舌を噛み切って自殺した。

なお、財産は没収することになるので、屋敷に住んでいるものは早々に立ち去れたし。

明日から作業を始める。

「本当なのか？」ブローディーもようやく事態を把握した。

「そんなことあるもんか、きつと拷問されたに違いない。きつとそ

うだー！」

コンパニー会長は怒りで震えた。マルス・スカーレットが、こんな状況でも持論を曲げなかった彼が、そう簡単に死ぬはずない。ただ、友人をまた1人失ってしまった事実はもう変わらない。

「ねえ、なにがあつたの？」怖がって押し黙っていたミステイが、やっと口を開いた。

「実はな、ミステイー。お父さんにはもう会えないんだよ。永久に。」

コンパニー会長は、その事実を伝えるのがとても辛かった。

「どうして？」

「…殺されたのさ。」

「だれに？魔道士？」

どうやらミステイーも、父が魔道士なるものを研究していたことは知っていたらしい。

「違うよ。」

「じゃあ、だれなの？」

「魔道士なんて、本当はいなかったと、思っているこの国の、全ての人たちにだよ。」

「…この国の人は、みんな、そうなの？」

状況が今一つ理解できていないミステイーは、そこで黙ってしまった。

だけど、大人達には悲しんでる暇もない。コンパニー会長は、ミステイーを抱きかかえながら、これからのことを必死で考えていた。この子は…ここにはもういられない。

さりとて自分の家には連れて帰れない。実業界をリードしている者としては、魔道士を全く信じていない者たちとも付き合わなくてはいいけない。だいたい自分の家族が受け入れてくれないだろう。だから、そんなところにこの子は連れ込めない。

この子はもう、一般社会には受け入れられないと思った方がいい。だから、彼女が行けるところは、他にない。

「ブローディー。」

「なんでしょうか、会長。」

「表の見張りを少し減らせないか？」

「大丈夫でしょう、しばらく来る気もないようですし。でも、なぜですか？」

「すぐに荷造りを…ミステイの所持品と、マルスの研究に関する物を全部引っ掻き集めるんだ。皆に手伝わせて、今夜中にムーライトに帰ろう。」

「ミスター、オリーブ夫人も、それでいいな？」

「もちろんですとも。」オリーブ夫人ははっきりと言った。

「このお嬢さんを見捨てるなんてことはしませんよ。」ミスターも同意した。

「どこに行くの？」大人たちの会話が途切れたところで、ミステイが尋ねた。

「ああ、このお家も取られちゃうことになりそうだからね。」コンパニー会長が答えた。

「私のお家に連れてってあげるわ、ブローディーみたいな強そうな人がたくさんいて、守ってくれるから、心配しなくていいのよ。」

オリーブ夫人が、安心させるようにそう言った。

「本当？本当に大丈夫？」ミステイは随分不安そうだ。

「ああ、おじさんが保証してあげるよ。」

コンパニー会長にミステイは答えなかったが、うつむいていた顔が少し上を向いた。

大きな瞳…ああ、本当にマルスによく似ている。

そうこうしているうちに、家の中に男達が数人入って来た。皆、表で見張りをしていた「ムーンライト」のメンバー達だ。

「さあ、始めるぞ。今日中にこの家を引き上げなければならんから

な！

とりあえず、残っている書物を全部運び出す準備を始めてくれ。」
会長の声で、彼らはいっせいに動き出した。

「そうだ、大切なことを忘れていた！」会長は重要なことを思い出した。

「どうしました、会長。」

「今思い出したんだが…、例の隠し部屋の中、何か本も入ってなかったか？」

部屋といっても、子どものミステイがやっと入れる位の小さなものであったが、それでも何かあった気がする。さつきは彼女の無事に安心しすぎて、何も気に留めていなかったが…

「そうでしたな、行ってみましょう。」

会長とミスターはとりあえず2階に引き返した。その一方で、ブローデーはムーンライト本部に連絡するために、そつと姿を消していた。

2階では、ミステイも、アイリスに連れられ、私物の準備にとりかかるうとしている。

「どうなさったの、おじさま。」

「いや、ミステイ、お前が入っていたところ、他には何が入ってたんだ？」

会長がミステイに話しかける横で、ミスターは扉の中を覗いている。

「お父さまの書いた本って、アイリスが言ってたわ。」

「本当！？本当にそんなものがまだ残っているのか！？」

「そうですとも、一番重要な物を放りこんでおきましたからね。」
隣でアイリスが得意そうにしている。

「なんなんだ、一体？」

「これは貴重ですよ、会長！先生の日記が残っています！」

ミスターが早速中身を取り出してきた。

「それはすごいな…他には？」

「えーっと…『王朝時代の政治学』これは、確か初めて出された本ですね。あと、これは…印刷されたものではないですね。もしか、自筆の原稿でしょうか？」

「何だと！？」

「これです。」

ミスターから渡された物には、『王制時代のわが国における魔道士の役割について』という、厚紙の表紙の中に、原稿らしき薄めの紙が綴じられている。

コンパニー会長は迷わずそれをめくった。まだ草稿段階なのだろう、原稿そのものは修正が数多く書き込まれており、非常に読みにくい。だが、そこにあるのは、紛れもなく、昔から見慣れたマルスの字だ。

「もしかしたら、世に出ないままになっていたかもしれぬ…よくぞ残ってくれたものだな。」

これこそ、マルスが生きたあかし。

残された娘、スカーレットとともに、何としても守り抜きたい。

会長は決意を新たにした。

「お父さまの本、書きかけのやつね。」いつの間にか、ミステイアが脇から会長を覗きこんでいる。

「ああ、お前と一緒に、ムーンライトに連れてってやる。」

「ムーンライト？なあに、それ？」

「私達の家だ。」

「さあさあ、一緒に帰るために、早く準備をいたしましょう。」

アイリスの声で現実に戻された2人は、また慌ただしく動き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2477s/>

闇夜に輝く月

2011年4月23日23時07分発行